

ピアノの発明と発達 その3

—モーツアルトの時代とフォルテピアノの製作家たち—

THE INVENTION AND DEVELOPMENT OF PIANO (PART3)

—THE MAKERS OF FORTEPIANO IN THE TIME WHEN MOZART LIVED —

鈴木 しおり

Shiori SUZUKI

北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
第 12 号 (2012)

ピアノの発明と発達 その3

—モーツアルトの時代とフォルテピアノの製作家たち—

THE INVENTION AND DEVELOPMENT OF PIANO (PART3)

—THE MAKERS OF FORTEPIANO IN THE TIME WHEN MOZART LIVED—

鈴木 しおり

Shiori SUZUKI

I. はじめに——研究の必然性——

モーツアルトの生まれ育ったザルツブルグには、1775年にコロレド大司教が購入したスクエア・ピアノ（ツヴァイブリュッケンの楽器製作家バウマン製作）が入るまでフォルテピアノがあったという記録はほとんどなく、そのため彼はチェンバロとクラヴィコード、オルガンで鍵盤教育を受けて育った。モーツアルトが質の良いフォルテピアノに出会ったのは1777年10月にアウクスブルグの楽器製作家シュタインの工房を訪れた時がはじめてである。高価なシュタインの楽器は、当時のモーツアルト一家にとって手の届くものではなかった。すでに21歳になっていたモーツアルトは、その後、フォルテピアノの奏法に磨きをかけ、25歳のときにはクラヴィーア奏者としてウィーンの社交界に登場する。

最初のうちは、シュタインのフォルテピアノを貴族から借りて演奏会に臨んだが、ついには自分の楽器としてヴァルター製作のフォルテピアノを持つことができた。モーツアルトは、その楽器に本体よりも大きい足鍵盤を製作してもらい、自作の演奏会で低音を付加して効果を大いに上げた。

明るく軽いシュタインのピアノの音色に比べ、ヴァルターのピアノは暗く重量感のある音色をもっており、その後のモーツアルトの作風に大いに影響を及ぼすところとなる。足鍵盤の使用法については現存する資料も少なく、どのように効果的であったかさえも謎に包まれている。

クリストフォリが1700年にフォルテピアノを発明し、その後、彼の仕事を引き継ぐ者が出ず、フォルテピアノは一時は存亡の危機にあったが、ジルバーマンによって再び製作されるようになった。その後、ズンベによるスクエア・ピアノの大量生産で人々の家庭にも普及し始め、シュタイン等の優れた製作家によって、グランド型ピアノのアクションにも改良が加えられはじめた。丁度その頃に、モーツアルトが成人を迎えクラヴィーア奏者として登場するのである。彼が残したピアノ・ソナタ、ピアノ協奏曲、幻想曲、室内楽等のピアノ作品には、年ごとや地域ごとに新しく改良されて変容していくフォルテピアノへの熱い視線が込められているに違いない。それはベートーヴェンやハイドンのピアノ作品においても同様である。

現代のハイテク楽器として定まった形のピアノに慣れてしまうことは、彼等の作品を演奏す

る際には大変に危険なことで、作曲家にインスピレーションをあたえ続けた当時のフォルテピアノの変遷を可能な限り詳細にたどり、想像することでイメージをふくらませ、作品の魅力を新たに掘り起こさなくてはならない。

Ⅱ. クリストフォリによって発明されたフォルテピアノのその後——独, 英, オーストリアでの発展と普及

クリストフォリ (B.Cristofori 1655～1731 伊) の後継者は、彼の周辺であるイタリアには現れなかった。ただ、彼が生涯に残した20台の楽器の一部がスペイン、ポルトガル、英国、ドイツに持ち出されて多くのレプリカが作成されたことや、マッフェイ (S.Maffei) がクリストフォリ製作のフォルテピアノに関する紹介論文を1711年に著したことなどで、ヨーロッパ各地に関心を集めてはいた。その中で、当時のフォルテピアノの発展と普及に貢献した楽器製作家について述べてみたい。

1) ザクセンのG.ジルバーマン (Gottfried Silbermann 1683-1753 独)

ザクセンのオルガン建造家G.ジルバーマンは鍵盤付きパンタレオン（演奏会用大型ダルシマー）の開発を手掛けていたが、マッフェイの紹介論文が1725年に独訳されたこともあり、1730年ころからクリストフォリとそっくりなアクションのフォルテピアノを製作し始めた。その時代の彼の楽器は、タッチも重く高音が弱いなど、本家のクリストフォリの楽器に劣るものであったが、その後、ドイツに運び込まれたクリストフォリの楽器に実際に触れる機会を得たと予想され、1745年頃には大いに改良を重ねた優れた楽器を製作するようになり評判を呼んだ。彼のお蔭で、存亡の危機にあったフォルテピアノが息を吹き返すことになる。彼の現存する楽器は3台で、そのうち2台はフリードリヒ大王が注文した品である。そのため、大王につかえたC.P.E.バッハがこの楽器を演奏することになり、息子を訪問した晩年のJ.S.バッハが1745年製作の楽器に大いに満足したことは有名な話である。

彼のピアノの特徴として、象牙を取り付けた板を振動している弦に近づけ、弦に雑音を出させることでチェンバロのような効果をねらったチェンバロ・レジスターを持つことや、パンタレオンの効果をねらった上下の手動式ダンパーペダルをもつことが挙げられる。ジルバーマンの工房では、ピラミッド・ピアノと呼ばれるアップライト型ピアノを開発したフリーデリーツィや、後にモーツァルトと大きくかわることになるシュタインも修行を積んだ。ジルバーマンは、イタリアの発明を遠くドイツの地で受け継ぎ、フォルテピアノの存亡の危機を救ったことや、シュタイン等の高名な弟子を輩出したことで、ピアノの発展に大きく貢献した製作家である。

2) ロンドンのJ.ズンペ (Johannes Zumpe 1735-90 英)

また、18世紀後半には産業革命などで英国に権力と富が集中しはじめ、ヨーロッパに対

代、3代と続くシュタイン一族のフォルテピアノにはバックチェックが取り付けられておらず、2度打ちさせやすくなっていることがある。つまり、強い打鍵を嫌う機構をあえて製作し、柔らかなころがるようなタッチの音楽のための楽器として製作されている^{ix}。

2) モーツァルトによるシュタイン・ピアノの印象

1777年10月17日付の父レオポルド・モーツァルトへ宛てた有名な手紙に、シュタインのピアノ工房を訪れ、初めて彼のピアノに触れたモーツァルトの印象が詳しく述べられている。「これまで南独レーゲンスブルグのピアノ製作者シュペートのクラヴィーアを一番気に入っていましたが、今ではシュタインのほうがまさっていると言わざ



図6. シュタインの第3期のピアノ^{xi}

るを得ません。このほうが、ずっとダンパーの抑えがきくからです。強く叩くと、指をのせておこうと離そうと、鳴らした瞬間にその音は消えてしまいます。～中略～彼の楽器が他と比べて特にまさっている点は、エスケープメント (Escapement (英) Ausloser (独)^x) が付けられていることです。これがなければ、ピアノフォルテのハンマーが引っかかりたり跳ね返ったり (カタカタしたり、余韻が残ったりするのを) するのを防ぐことができません。あの人のハンマーは、鍵盤を叩くと、それをそのまま押さえていようと放そうと、ハンマーが弦を叩いたその瞬間に落下して (もとの位置に) 戻ります。^{xi}」

シュタインのフォルテピアノがモーツァルトに与えた印象は大きく、彼はこの地で自分のソナタを何度も演奏している。特に、K.284のソナタは、シュタインの楽器だと他とは比較にならないほどよく響くと伝えている。

IV. モーツァルト所有のヴァルター・ピアノ

G.A.ヴァルター (Gabriel Anton Walter, 1752-1826) は、当時のウィーンを代表する優れた製作家であった。モーツァルトは1782～83年にかけてウィーンでヴァルター製作のピアノ (1871年頃製作の中古品) を購入する。自身で所有する初めてのピアノである。

1) 現代のヴァルター・ピアノ (レプリカ) について

現在、モーツァルトの作品のフォルテピアノでの演奏や録音ではヴァルター・ピアノのレプリカを使用することが多い



図7. ヴァルターの肖像

が（彼の現存するピアノは18台），それは彼の1800年以降に製作したピアノのレプリカがほとんどである。これらのピアノは，モーツアルトが購入した1781年ころのピアノとは，同じ製作者とはいえ，まったく性能が異なるものである。彼の妻コンスタンツェは，夫の死後18年目に夫の楽器をヴァルターによって大幅に改修しており，モーツアルトが演奏した当時の様子を，現在では知ることができない。そのため，多くの資料や現存する他の楽器から，モーツアルトの使用した当時の楽器の研究が進められている。次に，モーツアルトが使用したヴァルター・ピアノの特徴を具体的に述べてみたい。

2) モーツアルトのヴァルターピアノの特徴

①高音域と低音域にわかれた2つの手動式ダンパー・ペダルをもつが，モーツアルトの要望で膝ペダルに改修された可能性もある。

②アクションは基本的にシュタインのウィーン式跳ね上げアクションであるが，バックチェックの有無は不明で，更に1809年の改修前は，エスケープメントが付いていないプレルメヒャーニクのアクションであった可能性もある（図11）。ヴァルターが彼独自のアクションを開発したのは1790年以降のことであり，1782～83年の時点では「木製のカプセルをもつ2本のアクション（ウィーン技術博物館とポーランドで所蔵）」が，1781年当時のピアノを知る研究資料として注目されている。

③アイゼンシュタットのハイドン博物館（ブルゲンラント州立博物館）が所有するヴァルター・ピアノは，モーツアルトの兄弟楽器（同時に並べて製作された楽器）で（図9）



図8. モーツアルトのヴァルター・ピアノ^{xiii}



図9. アイゼンシュタットのヴァルター・ピアノの内部構造^{xiv}



図10. モーツアルトのペダル付きヴァルター・ピアノの想像図^{xv}

シュタインに較べてより頑丈になっている。

- ④モーツアルトは、本体よりも約60cmも大きい足鍵盤を注文して製作させた。K.466の公開演奏（1785年）で既に使用された記録があり、その自筆譜には足鍵盤用の低い音符が記されている。渡邊順生は「こ

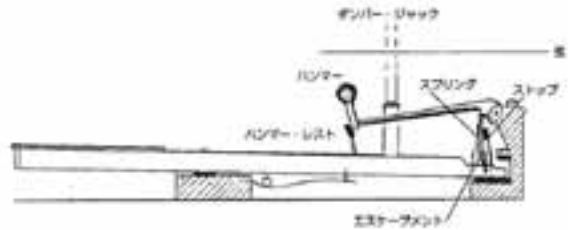


図11. 製作者不詳の1785年頃のウィーンのピアノ（シュトスメヒャーニク）^{xvii}

のデモーニッシュで父を思わず戦慄せしめた協奏曲のあちこちで、モーツアルトが臨機応変にペダル（足鍵盤）を頻用していたとしたら、この作品の姿は、われわれが聴き慣れているものとはずいぶん違うものであったことだろう」と、その著書で述べている^{xvi}。

V. まとめ——モーツアルトとクラヴィアー——

現代の私たちの知るモーツアルトは作曲家以外の何者でもないが、当時のウィーンの人々にとってのモーツアルトは、流行の最先端の楽器、つまり華やかなフォルテピアノの奏者として輝かしい存在であったろう。望む職にはつけなかったが、ピアニストとして演奏会を開催し、レスナーとして弟子をとり、音楽家として身を立てたのである。しかし、そのモーツアルトがフォルテピアノの真価を知ったのが21歳の成人後であった事実は重要である。それまでの彼は、チェンバロ、クラヴィコード、オルガン、タンゲンテンフリューゲルなどの鍵盤楽器を演奏していた。多くの土地を旅行し、さまざまな楽器に触れていただけに、新しく登場したフォルテピアノの魅力や可能性を素早く見抜き、その特徴を生かすピアノ曲の数々を残した。モーツアルトの作品はシュタインのピアノで一層、優雅さと華やかさを増し、ヴァルターの深みのある音色を得たことで、ロマン派に通じる劇的な表現の幅は一層広がりを見せた。それらの優れた作品が、今度は楽器製作家を刺激し、更なる改良へと駆り立てていったのであろう。作曲家と楽器製作家との刺激し合う関係は、ベートーヴェンの時代へと引き継がれていく。

-
- i 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍、2000年9月）528頁。チェンバロ製作家・柴田雄康氏によって描かれた。以後、同書引用によるアクションの図は、すべて同氏による。
- ii 小倉貴久子著『ピアノの歴史』（河出書房新社、2009年3月、35頁）29頁。
- iii Stossmechanik：イタリア、イギリスなどにおいて用いられたアクションの方式。クリストフォリによって最初に考案され、鍵盤外に設置されたレールに取り付けられたハンマーを、

鍵盤上のジャックなどが下から上向きの力で突き上げることにより回転させて打弦するアクション。「突き上げアクション」と訳される。

- iv Zugmechanik：シュトスメヒャーニクとプレルメヒャーニクの中間に位置すると言えるアクションの方式。鍵盤外に設置されたレールに取り付けられたハンマーを、各鍵盤に取り付けられたエスケープメントが下向きの力で引っ張り（引っ掛け）、回転させて打弦するアクション。「跳ね上げアクション」と訳される。
- v 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍，2000年9月）551頁。
- vi Prellmechanik：南ドイツ、及びオーストリアにおいて用いられたアクションの方式。ハンマーヘッドが奏者に向けて設置され、ハンマーの後端を下向きの力で引っ掛け、弾ませることによりハンマーヘッドを跳ね上げる機構のアクションで、Prellzungenmechanikも同義語に用いられる場合が多い。「ウィーン式跳ね上げアクション」と訳される。
- vii 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍，2000年9月）553頁。
- viii 前掲書557頁。
- ix 前掲書557頁。
- x Escapement：クリストフォリによって考案され、アクションの中でも重要な部品。ハンマーへ鍵盤の動きを伝え、しかも、ハンマーヘッドが弦に達する直前にその伝達を遮断する装置。
- xi 柴田治三郎編訳『モーツァルトの手紙』（岩波文庫，1980年8月）70～71頁。
- xii 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍，2000年9月）556頁。
- xiii 前掲書596頁。
- xiv 前掲書604頁。
- xv 小倉貴久子著『ピアノの歴史』（河出書房新社，2009年3月）35頁。
- xvi 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍，2000年9月）610～11頁。
- xvii 前掲書607頁。

[参考文献・引用文献]

- 1) 渡邊順生著『チェンバロ、フォルテピアノ』（東京書籍，2000年9月）
- 2) 小倉貴久子著『ピアノの歴史』（河出書房新社，2009年3月）

付記：この研究は、北方圏学術情報センター PORTO 音楽教育研究プロジェクトの助成金を受けて作成したものである。